

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370266

研究課題名(和文) 長い18世紀の英語演劇における兄弟像の社会・政治的研究

研究課題名(英文) The Social and Political Issues of Brothers in British Drama in the Long Eighteenth Century

研究代表者

岩田 美喜 (IWATA, Miki)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50361051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリス・アイルランド演劇における兄弟表象に注目し、長い18世紀(1688-1837頃)に、社会・政治的な変化を受けてその演劇的意味が大きく変わったことを、テキストの分析を通じて実証するものである。イギリスの経済はこの時期に、長子相続制度を前提とした土地経済から、帝国主義と結びついた重商主義的商品経済へ移行した。これを受け、初期近代演劇に見られる兄弟間の相続争いというトposでは不遇なる社会的周縁者であった弟が、軍人や商人といった帝国の中核を担う存在として書き換えられていくことを、本研究は明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research, dealing with the representations of brothers in British/Irish drama in the long eighteenth century (1688-1837), aimed at clarifying the drastic shift of their dramatic meanings through analyses of individual plays. During this period, the British economy gradually veered from the land-based economy which presupposed primogeniture to the mercantile economic system closely connected with imperialism. Accordingly, while younger brothers in early modern drama, banished from their patrimony, are depicted as a socially liminal existence, later theatrical texts move them to centre stage as merchants and soldiers who would play significant parts in the British Empire.

研究分野：英米文学

キーワード：イギリス演劇 アイルランド文学 家族論

1. 研究開始当初の背景

当該研究者は、平成 22-25 年度科学研究費補助金(22520224)で、18 世紀を中心とした近代英語演劇における他者表象の研究を進め、特に劇中における非標準英語の使用が、その話者を他者化して、差別言説を助長するイデオロギー装置としてはたらくとともに、対抗文化を披瀝・保存する転覆的な要素をも内包していることを明らかにしてきた。こうした研究を進めるうちに申請者は、ロンドン子従者を主な受容層とした近代イギリス演劇の世界において、疎外される立場に置かれた登場人物たちが、非標準英語を喋るのみならず、しばしば弟として表象されていることに学術的な興味を覚えた。

むろん、フロイトの『リア王』論がつとに示したように、弟妹というのは神話的・敷衍的なモチーフの一つではある。だが、イギリス演劇においては、弟の表象が常に具体的な相続や篡奪のプロットと絡み合い、庶子とその属性を重ねられるという、特殊な事情がある。従来は、これは封建制度下のイングランドで封土の分割縮小を防ぐために儲けられた長子相続制度を反映されたものと考えられてきた。

だが、初期近代演劇においてこのような理解が進んでいたからこそ、18 世紀演劇研究は、弟の表象について、こうした L. A. モントローズやマイケル・ニールといったルネサンス演劇研究者の知見をそのまま借受けるという過誤を犯してきたと、当該研究者は考えた。名誉革命からのヴィクトリア女王の即位まで(1688-1837)を緩やかな一つの時代と捉える長い 18 世紀の時代には、イングランドにおける絶対王政が終わりを迎え、商人や軍人を中心とした海洋貿易国家として「ブリテン帝国」という新しいナショナル・アイデンティティが形成された。これを受けて、伝統的な争う兄弟のトposがどのような変遷を遂げたかを調査することにより、長い 18 世紀の演劇における兄弟表象の特殊性のみならず、植民地表象という従来あまり結びつけられることのなかった側面との連続性もが明らかになり、これまで比較的等閑視されてきた 18 世紀演劇研究に、新しい光が当たることが期待された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、長い 18 世紀の英国・アイルランド演劇を対象とし、その兄弟表象を渉猟することで、同時期のエピソードの変化と演劇との密接な関係を明らかにすることにあった。英国では 15 世紀頃より、世襲財産の分割消尽を防ぐために長子相続制度が採られるようになり、そのため従来の演劇研究では、初期近代の演劇における兄弟の相続争いという関係ばかりが強調されてきた。上述のモントローズ(L. A. Montrose, "The Place of a Brother in *As You Like It*: Social Process and Comic Form," 1981) やニール

(Michael Neill, *Putting History to the Question*, 2000) などはその好例といえよう。

だが、実際には兄弟間の確執という主題は、英国社会の経済基盤が土地から交易へと移った 18 世紀以降においても、連綿と踏襲されている。例えば、カンバーランドの『西インド人』(Richard Cumberland, *The West Indian*, 1771) やシェリダンの『悪口学校』(R. B. Sheridan, *The School for Scandal*, 1777) などが、その好例としてあげられる。兄弟とは、時代とともに階級・ジェンダーや植民地など種々の問題を重ね書きされ、商業・海洋国家として自らを規定しつつあった英国の心性と複雑に絡み合いながら育ってきた、柔軟な器なのである。これらを実証することによって、単に感傷喜劇が流行した時代として過小評価されてきた 18 世紀の演劇が、実は遙かに広範な視座を持っていたと実証することが本研究の目的であり、具体的には、文献・映像・実際の上演などの資料を多角的に扱いながら、以下の 4 点を段階的に明らかにすることにあつた。

(1) 長い 18 世紀の間に上演・出版された英語演劇をできる限り網羅的に収集し、そこに現れる兄弟を中心とした家族の表象を、年代別、作家別、地域別、テーマ別などからデータベース化し、幅広い研究のためのマテリアルを構築する。

(2) 収集したデータの分析を行い、本研究のこれまでの 18 世紀演劇研究の成果を活かしながら、名誉革命体制からヴィクトリア朝へと至る時代の演劇テキストに表された家族と財産相続のモチーフにどのような質的变化が起きたかを、通時的かつ多地域的に分析する。

(3) イギリス社会史や法制史など、他分野の専門家の研究成果を積極的に活用し、演劇研究によって得られた知見を、より学際的な視点から深化させる。

(4) 本研究の成果を、国内外の学会や国際的な学術雑誌等で積極的に発表し、さまざまな研究者と広く意見を戦わせることによって、本研究の提示する「演劇における弟(家族)表象が内包する意味の質的变化」という研究モデルを、国際的に通用するものとして高めていく。また、これらの研究成果を中核に、初期近代から 20 世紀にいたる「兄弟と相続の演劇的系譜学」を論じた単著を執筆・出版し、最終的な成果を広く世に問う。

3. 研究の方法

本研究の最大の特徴は、イギリス・アイルランドを中心とした英語演劇の伝統的モチーフのひとつである兄弟の表象が、長い 18 世紀の時期に質的な変化を起こすことを、時代的にも、その学際性においても、個人研究としては類を見ない視野の広さでもって、立体的に研究することにあつた。そのため具体的にどのような方法を執ったかを具体的に述べれば、以下ようになる。

【時代を超えた間テクスト性の重視】通常、演劇研究者はその専門とする時代を限定しており、たとえば初期近代演劇の研究者は16-17世紀、現代演劇研究者は20世紀以降の作品しか取り扱わない。だが、その専門性の高さゆえに、従来の演劇研究は広い視野を持った系譜学を欠いてきたという恨みがある。だが、本研究は2000年度に提出したW. B. イェイツの演劇に関する博士論文以来、若手の頃より越境的な研究アプローチを試み、18世紀に中核を据えつつも、初期近代から20世紀に至る演劇の研究を意欲的に進めてきた。この実績の上に、本研究では従来の個別研究を凌駕した幅広い時代や分野のテクストを渉猟し、その間テクスト性を立体的に提示した。

【力学的な表象文化論】上記に関連して演劇に関する兄弟表象の重層性を主張する本研究は、その重層的意味を静的なものではなく、時代に合わせて変化する力学的なものとしてとらえた。初期近代演劇では主として長子相続制度にまつわる骨肉の争いを示唆していた兄弟が、長い18世紀の時代に、植民地からの富の流入と、相続からあぶれた弟たちこそ、そのような新しい富をもたらす新型の紳士—貿易商人や軍人など—となり、さらにヴィクトリア朝以降には、こうしたモデルが徐々に解体されていくことが、本研究によって実証された。かくて、演劇における弟とは、孤立した点の集合ではなく動的な流れとして、新たに認識されるべきことが明らかになった。

4. 研究成果

本研究は、すでに繰り返し述べているように、長い18世紀の英国・アイルランド演劇における兄弟表象を渉猟することで、同時期のエピステーメの変化と演劇との密接な関係を明らかにするもので、その性格上、個人研究としては広範な文献や映像資料に当たる必要があった。そのため研究の初年度にあたる平成26年度には、2014年9月-2015年3月までの半年間あまりの間、ケンブリッジ大学ウルフソン・コレッジに在籍し、資料調査に重点を絞った研究を進めた。

ここで得られた資料をもとに、本研究社が当該年度中に完成させた雑誌論文は2本（英語論文1本、日本語論文1本）であるが、特に『十八世紀イギリス文学研究』（日本ジョンソン協会編）に掲載された日本語論文は、ジョージ・ファーカー（George Farquhar）とシェリダンの戯曲における弟たちの変遷を追うもので、本研究の中核となった論文のうちの一つであった。

研究の2年目に当たる2015年度に本研究者が行った口頭の成果発表は1本で、完成させた論文は2本（英語論文1本、日本語論文1本）である。本年度の成果の大きな特徴は、

長い18世紀の後半に焦点を当て、19世紀初頭の演劇について集中的に研究を行っ

たことにある。例えば、上記の日本語論文では、チャールズ・マチュリンによる戯曲『バートラム』（1816）を「ジャコバン主義」として批判したS. T. コールリッジの解釈には、彼自身に手による兄弟の争いを描いた悲劇『悔恨』（1813）へのパリノード的な要素があったことを指摘した。これらの芝居は、これまでのイギリス演劇研究では長らく等閑視されてきたものであり、本研究課題の問題的によって初めて、小説家や詩人としてのみ知られてきたマチュリンやコールリッジによる演劇の重要性が、しっかりしたテーマ性をもって明らかにされたといえよう。

本研究の最終年度である2016年度には、資料調査のために海外渡航をするなど、基礎研究に力を入れてきた過去2年間とは異なり、研究成果を世に問うための執筆活動に力を入れた。その最大の成果は、『兄弟喧嘩のイギリス・アイルランド演劇』（松柏社、2017）という単著の上梓にある。この書物においては研究の対象とする戯曲を中世から19世紀末にまで拡大し、かなり広い射程で兄弟表象を捉えているが、その根幹にあるのは「長い18世紀の時代に、兄弟喧嘩という伝統的なトポスに質的な変化が起こる分水嶺なのだ」ということであり、まさに本研究の実績が結実したものと言って良い。ルネサンス期に演劇のポピュラーなトポスとなる「兄弟と相続」の問題は、実は聖書にまで遡り得るほど古い主題である。だが、18世紀に、ブリテン帝国という新しいナショナル・アイデンティティが、重商主義をその実践的イデオロギーとして英国に確立し、長子相続制度に基づいた土地中心の経済がもはや自明のものではなくなった時、演劇は時代とともに兄弟の表象を適合させていったのである。

なお、当該年度には、そのほかにも関連する英語論文を1本、日本語論文を3本発表しており、当該研究は充実した成果をあげられたと言えよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

1. 岩田美喜、「『文学評伝』を通じて見たマチュリン演劇の反演劇性」『東北口マン主義研究』第2号、2015年、67-82。査読無
2. IWATA, Miki, “Oaths and Promises in Dion Boucicault’s Spectacular Melodrama,” *Shiron* 50 (2015): 21-41. 査読有
3. 岩田美喜、「人類みな兄弟じゃないのかよ—ファーカーとシェリダンの戯曲に見る弟たちの変遷」『十八世紀イギリス文学研究』第5巻、2014年、75-93。査読有
4. IWATA, Miki, “Modern Japanese Helenas in a

Metropolitan Courtyard,” *Shakespeare Review* 50.5 (2014): 861-79. 査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 岩田美喜、「「ぼくは郵便局にいた」－イエイツの戯曲に見る復活祭蜂起の表象－」(シンポジウム「イエイツと復活祭蜂起」)、日本イエイツ協会第 52 回大会、2016 年 10 月 22 日、東海大学高輪キャンパス
2. 岩田美喜、「『ハムレット』をめぐるギャリックとジョンソン博士の奇妙な関係」、日本シェイクスピア学会第 55 回大会、2016 年 10 月 9 日、慶應義塾大学三田キャンパス
3. 岩田美喜、「チャールズを探せー『若気の至り』における兄弟の逆転と演技ー」(シンポジウム「18 世紀演劇の面白さ」)、日本ジョンソン協会第 49 回大会、2016 年 7 月 2 日、専修大学神田キャンパス
4. 岩田美喜、「レイディ・グレゴリーと 共同体の記憶 のドラマツルギー」(シンポジウム「イギリス文学と感情の修辞学」)、日本英文学会中国四国支部第 68 回大会、2015 年 10 月 25 日、広島修道大学
5. IWATA, Miki, “A Sci-Fi Manga Meets the Bard: Shakespearean Moments in *Cyborg 009* and Its Adaptations,” *Shakespearean Journeys* (Conference held by the Asian Shakespeare Association), 16 May 2014, National Taiwan University

〔図書〕(計 8 件)

1. 岩田美喜、『兄弟喧嘩のイギリス・アイルランド演劇』、松柏社、2017 年、xii + 352 頁. 単著
2. 木村正俊編、岩田美喜ほか著、『文学都市ダブリン』、春風社、2017 年、448 (63-80) 頁.
3. Ralph Barnaby, et al., ed., IWATA, Miki, et al., *London and Literature, 1603-1901*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars, 2017. Pp. 156 (35-48).
4. 日本シェイクスピア協会編、岩田美喜ほか著、『甦るシェイクスピア-没後四〇〇周年記念論集』、研究社、2016 年、282 (217-34) 頁.
5. 東雅夫・下楠昌哉編、岩田美喜ほか著、『幻想と怪奇の英文学 II』、春風社、478 (99-119) 頁.
6. 岩田美喜ほか著、『フィクションのポリテクス』、英宝社、2015 年、139 (67-107)

頁.

7. 木村正俊編、岩田美喜ほか著、『アイルランド文学 その伝統と遺産』、開文社、2014 年、698 (157-73) 頁.
8. 東雅夫編、岩田美喜ほか著、『幻想と怪奇の英文学』、春風社、2014 年、407 (131-59) 頁.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
岩田 美喜 (IWATA, Miki)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50361051

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()